

○町家の外観

八幡の伝統的町家は、木造・切妻屋根・日本瓦葺き・平入り形式の大きな枠組みを持っている。外観のタイプとしては、高二階町家・中二階町家・平屋町家などである。

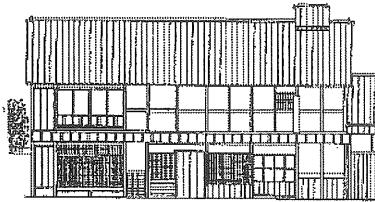
町なみは、主に中二階町家が軒高14尺前後の高さで整然と立ち並んでいる。高二階町家もあるが、その数は少ない。

もっとも多い中二階町家について述べると、二階は道路前側の天井が低く、「つし」と呼ばれ、主に物置や使用人・家族の寝間として利用されていた。

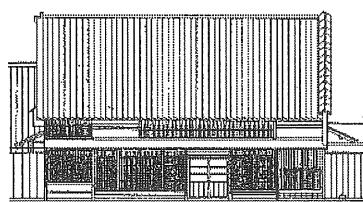
二回外観は真壁造りで、塗壁には漆喰・大津壁が塗られている。塗壁の造作には貫見せ（壁面の貫を露出させたもの）と貫隠し（貫を壁に塗り込めたもの）の二通りがある。特に貫見せは他に例の少ない意匠である。二階開口部の格子窓・出格子・面格子は二階部分を上から下まで覆うものと、貫などで区切られて下部に小壁を見せていているものがある。うだつ・袖壁のついた町家も随所に見られる。通り庇は瓦葺き・柿葺き・板葺きと多様であるが、今は大半が瓦葺きである。柿葺き庇や板葺きは古い様式である。

一階外観もそれぞれの町家に応じて変化に富む形態を示している。出格子・面格子・引違い格子戸・引込式の小さな格子戸を持つ格子大戸・腰下見板付壁・壁につけられた出格子などが主な意匠要素である。格子の形状はさまざまであり八幡の町なみに調和している。なお、入口以外の一回の道路側の開口部は、古くはシトミ戸・摺り上げ戸となっていた。

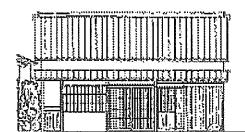
中二階町家の特殊な様式にむしこ町家がある。むしこは漆喰・大津壁などを塗った堅格子で、二階開口部の形式であり、その内側は主に納戸などの物置スペースに用いられる。二階は真壁造りで、貫見せ・貫隠しの両方がある。通り庇・一階造作は中二階町家と同様である。



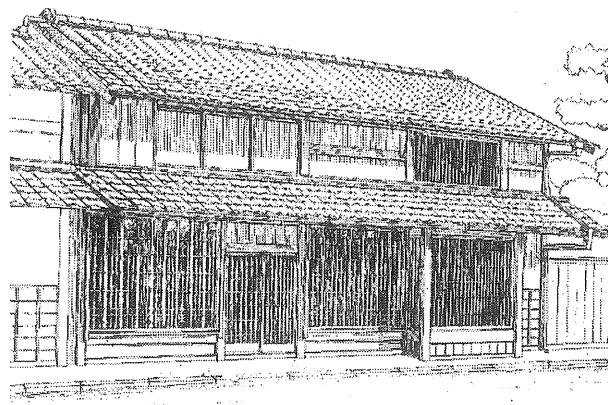
高二階町家



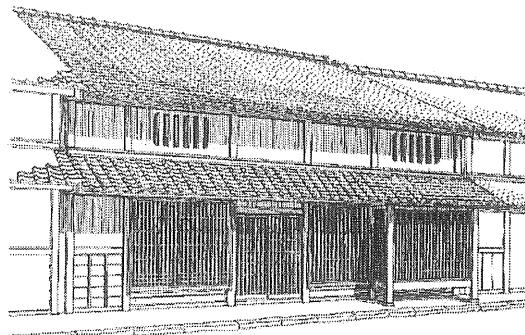
中二階町家



平屋町家



↑中二階町家



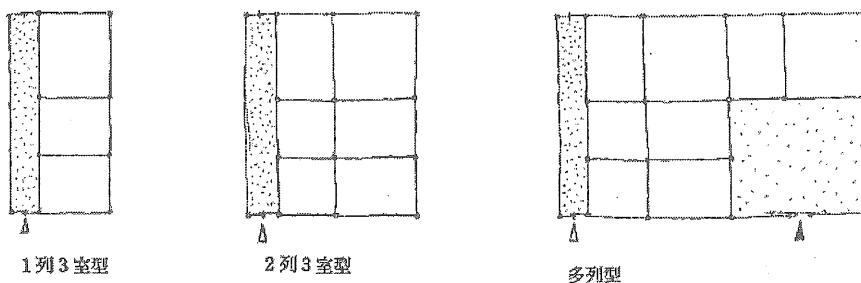
↑むしこ町家

○町家の平面

八幡の宅地割は、間口が狭く、奥行の長い短冊状で、いわゆる「うなぎの寝床」になっている。この形態は、八幡城下とともに誕生したものと考えられている。その形態を受けて八幡の町家は間口が狭く、奥行が長い。

母屋の平面は大きく土間と居室に折半され、いわゆる通り庭形式の町家に属する。土間は間口が2間から3間のものが多く、1間半程度のものは建造年代が比較的新しい。これを京都の町家と比べてみると、土間の間口が大きいことが特徴といえる。

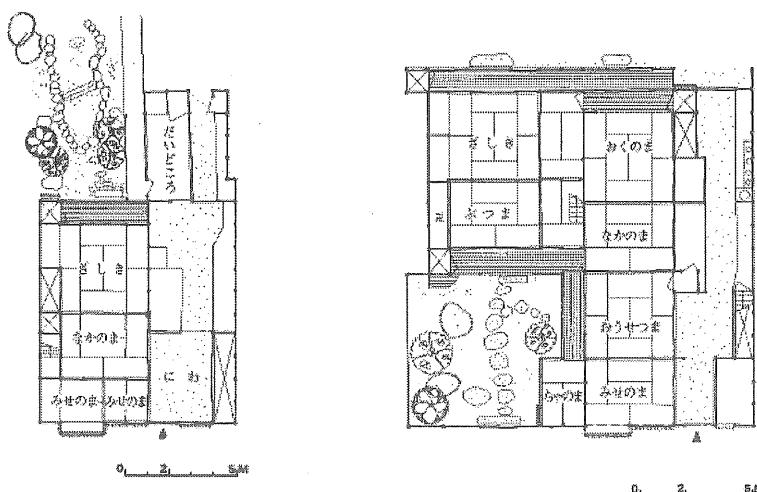
居室部分は大きく1列型間取り・2列型間取り・多列型間取りに分類できる。さらに各列の部屋数に応じて2室・3室・4室の3種類が見られる。なお、1列型は間口5間未満のものが多く、2列型は間口6間以上のものに限られる。



ここでは八幡で代表的な1列3室型と2列鍵座敷型を述べてみた。

1列3室型について、居室は入口から「みせ」「なかのま（だいどころ）」「ざしき」となる。また多くは「なかのま」に2階への上り口を備えている。また、奥野台所土間は吹き抜けになっており八幡の梁組がよく見える。

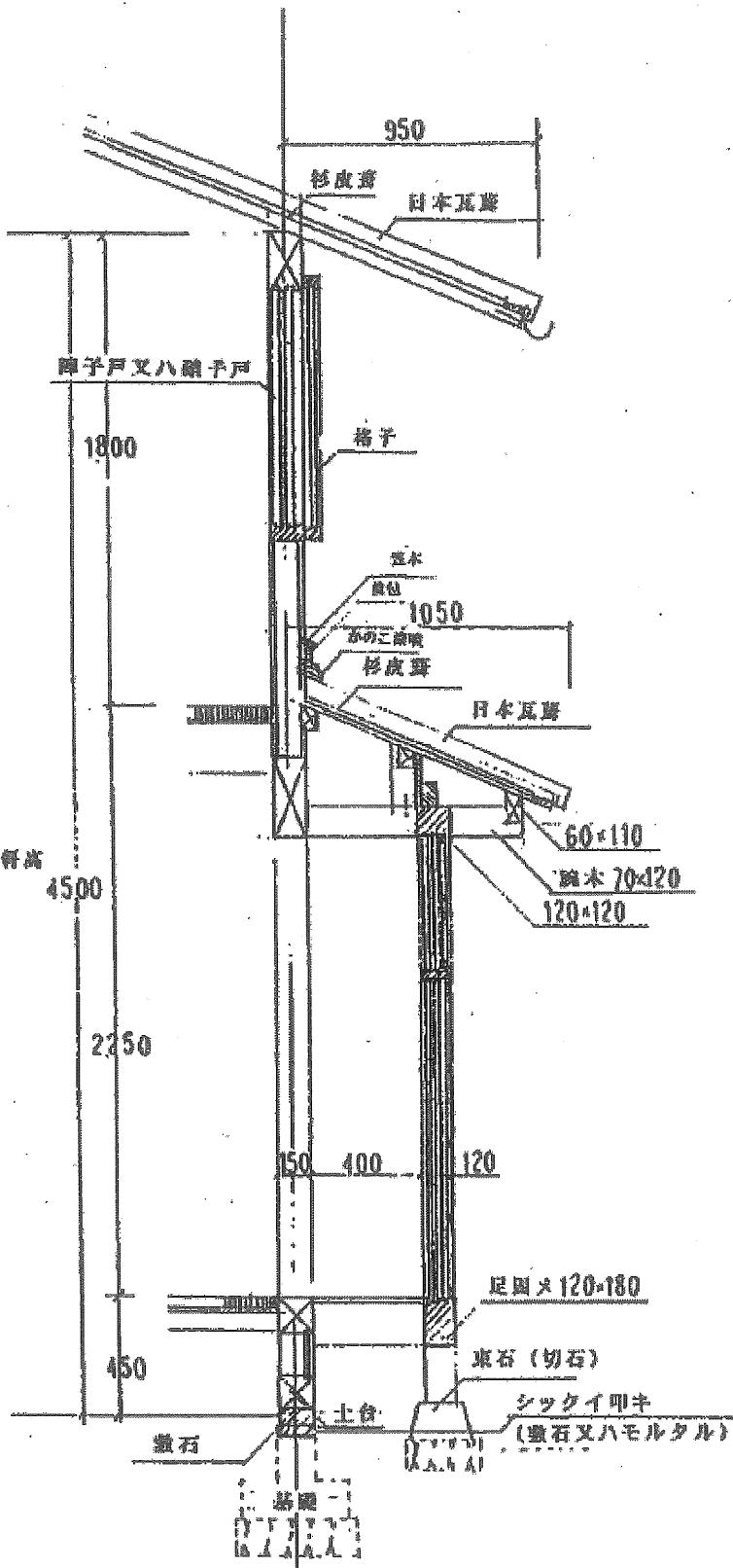
2列鍵座敷型について、1列型の発展系として比較的多く見受けられる。1列3室型の「なかのま」と「げんかん」を分けた2列型4室であるが、座敷空間である「ざしき」「つぎのま（ぶつま）」を母屋から鍵の手に突出させ、道路に沿って庭を造り、高塀を巡らせている。また、ここに貴賓用の玄関を設けてある。



↑ 1列3室型

↑ 2列鍵座敷型

○基本矩計図



中二階の町家が多く、軒高は出来るだけ町なみの高さに合わせる。

前側は土台据えとするが、入り口などは土台の高さをかき取って低くする。基礎は、コンクリート基礎とするが、前側など見えがかりは敷石を置くのが好ましい。

道路側の壁面線は下屋を設けず、1階と2階の壁面線を通す。また、道路側の塗装には大津壁・黒漆喰が多く塗られている。（妻側は漆喰塗となっている。）

礎石立ちの出格子については、その上が通り庇に接しており、京都のように屋根を持つものは見られない。格子については、八幡らしい格子（近隣の格子を調査して、縦桟・横桟のサイズ、ピッチ等調査を行う。）の設置が望まれる。

通り庇の腕木の先端は、桁で止まっている。新たに施工する場合は、隣の庇と通っていることが望ましい。

町家の構成要素としては、出格子・面格子・腰下見板付壁・道路側の通り庇などが重要な構成要素となっている。修景（新築・改築等）を行う場合は、設置が望まれる。

○木材について

適材適所といわれるよう、使用箇所により、適材を選ぶことが大切である。

腐りやすく加重が多くかかる土台などはクリ。ヒノキ。ヒバの心持材が適し、曲げ抗力が必要な梁・桁などの構造物にはマツの心持材が適している。

乾湿交互にあたる箇所には、ヒノキよりも対腐性が強いクリ・サワラなどの香りの強い木材が良い。

造作材には肌目・色・木目の良いヒノキ・スギが喜ばれる。

○八幡の町家の間取り

重要文化財旧西川家住宅の柱間は、柱の内法寸法6尺3寸の整数倍となっている。

これは京畳（6尺3寸）を敷けるように定められている。つまり、1間の場合、畳の寸法である6尺3寸に標準の柱幅4寸を加えた6尺7寸となる。また、2間の場合、6尺3寸の畳2枚に標準の柱幅4寸を加えた13尺となり、1間あたり6尺5寸となる。

標準の柱間は6尺5寸が望ましい。

○出格子について

出格子を形式別に分けると、柱外面から持ち送り肘木を出して窓に取り付けられている出格子と、出格子柱を東石立ちとして掃出し窓に取り付けられている出格子とに分かれる。

基本矩計図については、標準的な東石立ちの出格子を示した。

格子は仕舞屋格子が多く取り付けられている。柱間の内法高に中敷居を設け、上は外を窺うのに便利な荒い格子とし、下は細い豊格子を割り付け、3本程度の横桟で止めた格子もある。

また、中敷居を設けない格子や板格子もよく取り付けられている。

出格子の周りに敷石を置き、出格子を直に取り付け、足固めを設け、下框と足固めの間に嵌め 板を取り付けた腰板下見板張付出格子も見受けられる。

○通り庇について

通り庇の屋根使用は、瓦葺き・柿葺き・板葺きなど多様で、板庇または柿葺きの庇に銅板を葺いたものも見受けられるが、大半は瓦葺きである。

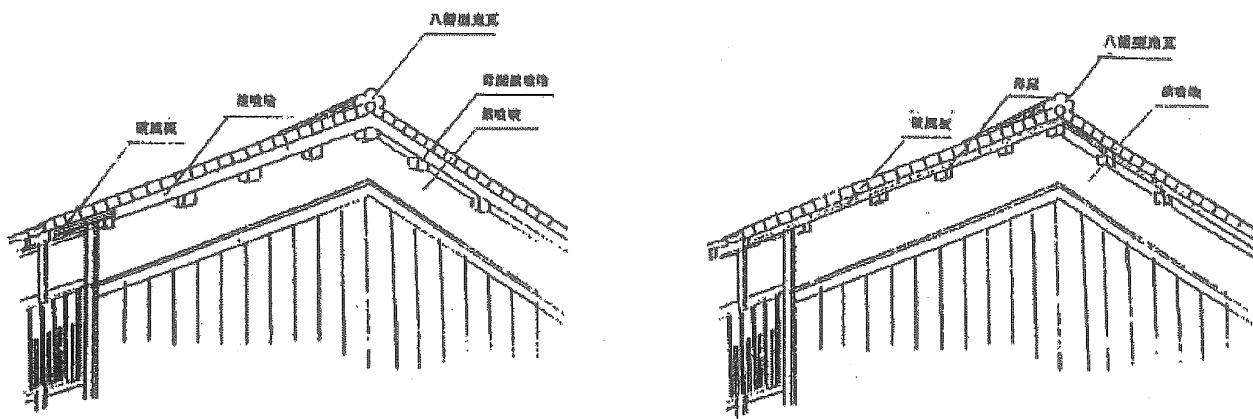
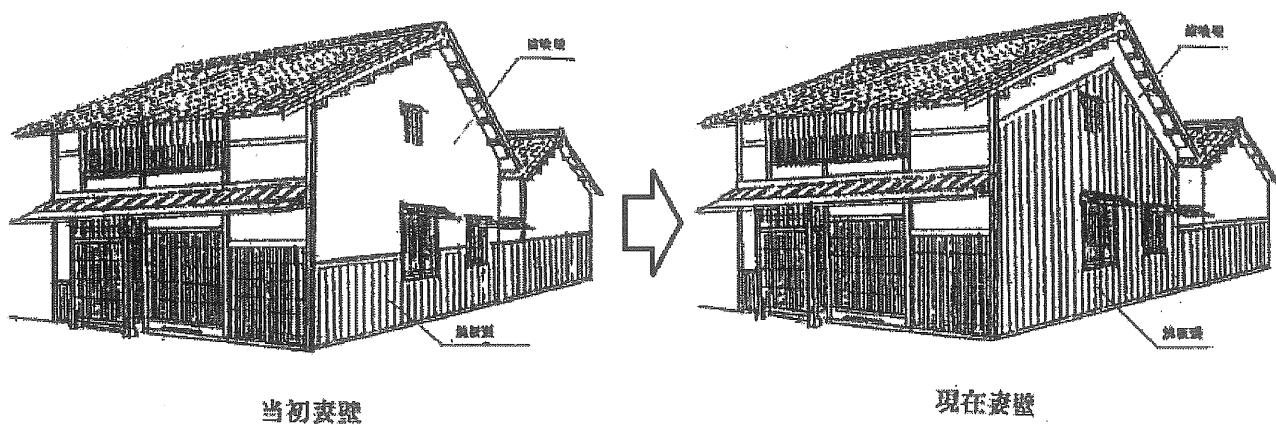
基本矩計図については瓦葺きとなっているが、板葺き（先端は銅板葺き）の通り庇も随所に見られるので、設置が望まれる。

○妻側の外観について

妻側の外観については、角地の町家にしか事例がなく、従来の形態の調査が難しい。数少ないが角地の伝統的建造物の町家の形態や、重要文化財旧西川利右衛門家住宅の形態、町なみ保存事業で修理をした際に実施をした調査により、妻側については、当初は柱・梁を見せず大壁となっており、1間（H=1.8m）程度の腰板張（船板・焼板張等）の上は漆喰塗となっていることが推定される。その後、妻側の漆喰壁については剥がれやすいことから、腰板張（焼板）の面積が徐々に増えていったことが推定される。

妻側のけらば部については漆喰仕上げと破風板張仕上げが見られる。けらば部の出は1尺（30cm）程度となっており、隣家火災の防止のためか出は少ない。

破風板張仕上げの特徴としては、破風板幅が4寸程度となっており、母屋先が見えているのが特徴といえる。



けらば部漆喰塗仕上

けらば部破風板仕上